

## 鉄砲洲神社詩吟 素読論語解説

(平成 27 年 3 月 6 日)

【二六】蘧伯玉 人を孔子に使わす。孔子 之に坐を与えて問う。曰く、夫子 何をか為すと。対えて曰く、夫子は其の過ちを寡くせんと欲して、未だ能わずと。使者出づ。子曰く、使いなるかな。使いなるかなと。

蘧伯玉は、五十にして四十九年の非を悟る。過ちを知るといふ言い方ですが、五十歳の時に、今までの人生を振り返ってみると、自分は反省することばかりである。これから先はきちんとした人生を送りたいものだとして、五十にして四十九年の非を知る。

今の時代でも使われていまして、七十にして六十九年の非を知るなどという言い方もします。八十にして七十九年の非を知る。いつまで経っても非を知ることばかりだと感じますが、その元になった人の話です。

蘧伯玉が使者を出して、孔子のところへお見舞いに来ました。孔子は訪ねて来た使者に座布団をすすめて、その上で孔子が「蘧伯玉先生は毎日何をしておられますか」と問いかけました。使者が答えて言うには「先生はミスが減らそうと心がけていますが、なかなか思うとおりに出来ぬといっておられます」と。使者はそこで帰りました。それを見て立派な使者だ、こういう使者をお使いに出せる蘧伯玉先生はたいしたものだ。

「使いなるかな。使いなるかなと」は、「立派なお使者だ、お使者だ」ということです。このような使者を持っている蘧伯玉は素晴らしいという会話です。

蘧伯玉は、人徳が溢れるばかりで素晴らしい人間だといわれていました。蘧伯玉は、孔子の人となりも分かるし、孔子も蘧伯玉の人となり分かる。人は人を知るといふ話になると思います。

今の時代で考えて見ますと、身の周りを見て「あいつはたいした人間だ」と、自分も言うし周りも言う。そういう友人関係があると良いですね。周りを見回して「後始末あいつに頼む」と言えるような人間を作ると、人は人を知るといふお付き合いになると思います。

友人も親しい友だけではなくて、専門的な能力を持つ人間が定期的にお付き合いして、「このことはあいつに頼むよ」と言えるような最後を迎えられると良いかと、この文章で感じました。